

惜別の辞

吉岡中学校の閉校にあたり感謝と惜別の気持ち
を込め、ご挨拶を述べさせていただきます。

吉岡中学校の閉校は、私にとりましても感慨深いものがあります。昭和二十六年、吉岡村洋裁講習所が設立され、教員となった母の赴任と共に、現在の吉岡幼稚園の場所に住まいしておりました。窓からグラウンドを挟んで中学校が見え、子供の目には、真新しい大きな学校というイメージが残っております。土田校長先生・本吉校長先生の時代でしたが、多くの先生方と交流させていただきました。昭和二十九年の洞爺丸台風。恐ろしく、うなる強風の中、母にしがみついて避難したことも思い出します。周辺の山や川で夢中になって遊んだ記憶が鮮明に残っておりますし、グラウンドで野球をしたり、走り回る大きな中学生の姿や、運動

会の賑わいが、目に焼き付いております。

吉岡中学校の校歌に謳われている校是「自主独立」は、学校創立に懸けた関係者の思いと、長い歴史の中で多くの逸材を輩出し、培われてきた吉岡地区の地域力・教育力から表現されたものではとの思いをいたしております。

案内をいただき、入学式、運動会、学校祭、そして卒業式と学校に伺いますが、生徒たちは、しっかりと挨拶ができ、しっかりと発表ができ、いつでも明るい笑顔が清々しく、心あらわれる思いをする事も度々でしたし、生徒達を思う、先生や父母の話に感動し、涙腺がゆるむ事もありました。

吉岡中学校は、地域の人たちに、生徒や先生の顔が見える学校、地域と連携して生徒達の個性を尊重する学校であったと思いますし、学校、家庭、地域が一体となった取り組みは、学校教育の理想の姿を見る思いをいたしておりました。

戦後六十年を過ぎ、社会環境も大きく変貌、価

値観が多様化し、教育の現場でも想像できない複雑な問題が数多く提起されている状況の中で、「不易の教育理念」を再認識し、未来を担う心身ともに健全な子供達の育成を目指す当町学校教育の中で、重要な役割を果たしてきた吉岡中学校の閉校は、誠に残念で、断腸の思いもあります。

過疎・少子化は、時代の流れとはいえ、大きな変革に翻弄され、適切な対策が叶わず、結果として閉校する事は、非常に複雑な心境であり、町政運営の一端を担う者としてその責任を痛感いたしております。

大きな役割を担ってきた伝統ある吉岡中学校は、多くの皆様が、献身的な努力を重ね、営々として築き上げてきた輝かしい栄光の歴史を閉じる事となりました。

同窓生や地域父母、そして教職員の皆様には、語り尽くせない万感の思いがあります。学校運営にご尽力いただきました皆様に敬意の気持

ちを込めて心から感謝と御礼を申し上げます。

無限の可能性を秘めた吉岡の子供達が、「自主独立」の精神を受け継ぎ、未来に向かって大きくはばたく事を心からご祈念し、「吉岡中学校」への惜別の辞といたします。

平成二十二年二月七日

福島町議会議長

溝部 幸基